

## エッセイ

## 楽しい“虫音楽”の世界

(その18 鳴く虫を愛するのは日本人だけ?)

昆虫芸術研究家

柏田 雄三 (かしわだ ゆうぞう)

鳴く虫の声を美しいと感じるのは日本人だけだと書かれているのをときおり目にする。外国人が雑音だと感じたり、全く注意を払ったりしないことを体験として話す人もいる。鳴き声を右脳と左脳のどちらで受け取るのかに起因するとする角田忠信氏の有名な学説に触れている人も多い。彼は日本人とポリネシア人がそのような特性を持つとしたが、先天的なものではなく、日本語の母音の特性が関係し、子供のころに日本語で育った人に備わるものだとしている。

理屈はともかく外国人はすべて虫の鳴く音の美しさをわからないと片づけてよいのだろうか。鳴く虫に関する文章を多く残したラファディオ・ハーン (小泉八雲) は虫の音の美しさを愛するのは日本人とギリシャ人だけだと述べた。因みに彼の母親はギリシャ人だった。

中平解氏は著書「鰻の中のフランス」の随筆「フランス人と虫の音」で、フランス滞在中の経験やたくさんの文学作品を例に「フランス人がコオロギの鳴く音を美しいと感じないと言う粗雑な考えはどこから来るのか自分には想像もつかない」と断じた。「自分が記録しただけでフランスの小説に130回もコオロギが出てくるが、日本の小説にこれほど多くコオロギが出てくるのか日本文学の研究者に尋ねてみたいものだ」とも指摘する。実際にそうなのかは「文化昆虫学事始め」(創森社)の加納康嗣氏による世界各地の鳴く虫文化の著述を読むとわかる。

中平氏に倣い、私もいくつかの実例を引いてみる。映画「悲しみよこんにちは」でジーン・セバーグ演じる多感な少女が「虫の音を聴いているの」と言うし、ベトナムの名画「青いパイアのかおり」では主人公の少女ムイがコオロギを飼って、その鳴き声を愛でるシーンがある。

中国ではオスのコオロギを闘わせる「闘蟋<sup>とうしつ</sup>」が有名だが、今でも鳴く虫文化が盛んだそう。古く唐の時代の杜甫の五言律詩「促織」を記そう。「促織」とはコオロギのことである。

促織甚微細 哀音何動人  
草根吟不穩 牀下意相親  
久客得無淚 故妻難及晨  
悲糸与急管 感激異天真

楽曲をいくつか記す。韓国の描写的な童謡《コオロギの歌合戦》、イタリア民謡《こおろぎは歌う》、鳴く虫ではないが無形文化遺産中国トン族大歌の働き者の象徴セミの美しい声をうたった《蟬の歌》。クラシック音楽にもフランスのジョスカン・デ・プレ (1450/55 ~ 1521) のコオロギの鳴き声を擬したフロットーラ《コオロギは良い歌手》をはじめコオロギや蟬の声を歌った曲がいくつもある。

角田氏の学説では、虫の鳴き声のほか鳥の鳴き声、川のせせらぎ、風の音、和楽器の音なども同じように位置づけられている。それでは外国人が鳥の鳴き声の美しさの曲を作ったのはなぜだろう。例えば夜鶯 (ナイチンゲール) の曲は枚挙に暇がない。

日本には狭い国土に色々な種類の虫がいて、配偶行動の際に相手を間違えないよう鳴く虫やセミの声が多様化したという説を読んだ。そうなるに昆虫側にも原因の一端がある。動物や鳥の鳴き声を表す言葉として日本語は「鳴く」と「啼く」くらいであるのに対し、英語には70ほどの単語があり動物や鳥の種類別に使い分けるそう。日本人が虫の鳴く音を楽しむからと言って感受性が優れていると自慢げに決めつけるのは止めたほうがよいと思うのである。



ジョスカン・デ・プレ作曲の  
《コオロギは良い歌手》が収録された CD  
NAXOS 8.554516